

令和4年8月20日(土)～

磁祖加藤民吉フォーラムⅣ

@瀬戸市文化センター

天草と加藤民吉

天草市役所文化課 参事 中山 圭

天草市の概要

- ・ 周囲を美しい海に囲まれた天草上島と天草下島および御所浦島などで構成する天草諸島の中心部
- ・ 面積
683.82 Km²
(参考：東京23区 627.57 Km²)
- ・ 人口
76,683人 (R4.1現在)
- ・ 交通
熊本市から車で2時間程度(約100km)。市内の端から端まで車で1時間40分程度。



天草市の名所・特産

- ・ 自然
海洋景観
⇒ 妙見浦
茂串海岸



- ・ グルメ
海鮮全般
天草大王（鶏肉）
柑橘類（デコポン）



- ・ 出身著名人
小山薫堂（脚本家）
WANIMA
（ロックバンド）



天草といえば「キリシタンの歴史」



天正遣欧使節。帰国後1591年から天草コレジヨ（神学校）で学ぶ。



天草に持ち込まれた活版印刷機。世界初の日本語とヨーロッパ言語の辞書も印刷された。



島原・天草一揆を率いた天草四郎時貞。

- ・キリシタン史は重要な観光コンテンツとして機能。
一方、キリシタンに傾注するあまり「陶磁器の島」としての啓発はおくれ気味。



世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」構成資産「天草の崎津集落」



キリスト教の信仰は、現在も続いています。

上田家がはじめた窯業「高浜焼」

- 天草下島西海岸では、国内最高級品質の陶石を産出。
⇒ 17世紀に、いくつかの陶磁器窯が創業も、いずれも17世紀代で終焉。
- 上田家=高浜村庄屋。元は信濃国の根津一族。真田昌幸・幸村に仕え、大坂陣の後に天草へ。宝暦12年(1762) 高浜村庄屋7代目 上田伝五右衛門 武弼(たけすけ・宜珍の父)が開窯。目的は「百姓作間稼ぎ」。膨大な古文書で陶磁器窯経営の状況が理解…未解読資料多数！
- 天領下の窯業、かつ輸出港長崎にも近いため、公儀からオランダ輸出用製品の焼成を打診。⇒佐賀藩有田焼の寡占状況への対抗。
安永7年(1778)～天明元年(1781)頃まで長崎出島に出張所営業。
…色絵磁器も焼成するが、技術の蓄積がなく苦戦。数年で取りやめ。
- 18世紀末から19世紀にかけては、陶磁器生産もしつつ、陶石の輸出にシフト。佐賀藩が厳しく規制した製磁技術も積極的に供与。…陶石非産出地での磁器窯勃興に一役。⇒後背に大消費地を抱えない離島民窯なりの創意。

上田家・高浜窯・東向寺位置図



天中和尚が住職を勤めた曹洞宗東向寺

じょうらん てんちゅう

げんさく よしうず

東向寺上藍天中和尚と上田源作宜珍

- ・天中和尚…瀬戸市菱野村出身。神蔵寺住職などを経て、寛政12年（1800）に天草東向寺15世住職に。『染付焼起原』では「遍歴の雲水僧」が推挙。
- ・東向寺…慶安元年（1648）着工、同4年伽藍完成。天草代官となった鈴木重成（足助出身）が、中華珪法を開山に迎え建立した曹洞宗寺院。島原天草一揆後の民心安定のために設置された天草四ヶ本寺のひとつで、徳川家の位牌を祀る。天明7年（1787）に「常恒会地」取得。以後、13世瑞岡珍牛（雲水僧？）、14世漢三道一、15世上藍天中と高僧続く。
- ・寛政13年（1801）10月 天中の授戒会へ高浜村から132名を参加させる。村民教化のための研修。11月22日 天中和尚、高浜村へ立ち寄り説法実施。この時から宜珍と天中は知己に。



天中和尚肖像

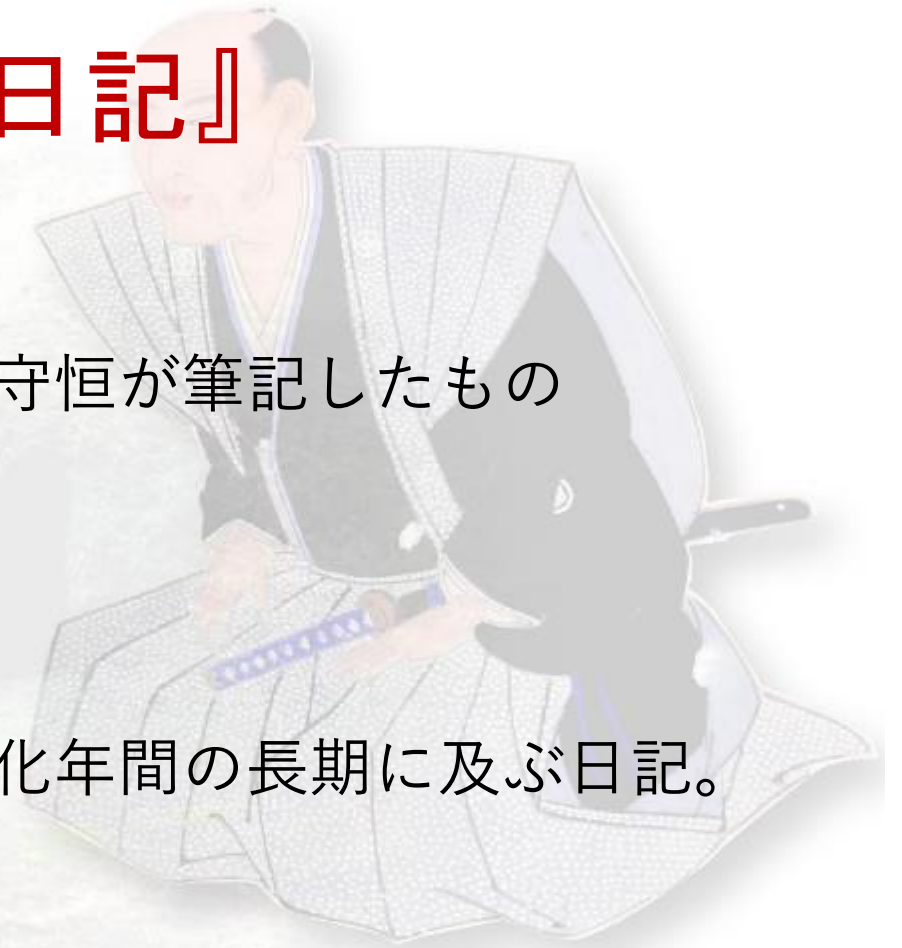
真実展展示・東向寺蔵

『染付焼起原』と『上田宜珍日記』

- ・ 民吉の足跡を語る基本史料は『染付焼起原』
文政元年（1818）加藤民吉の口述を二宮守恒が筆記したもの
⇒ 瀬戸側の記録
- …天草でも資料が発見される…
- ・ 上田源作宜珍が書いた『上田宜珍日記』
宜珍が庄屋として勤めていた寛政・享和・文化年間の長期に及ぶ日記。
上田家にしっかりと残されていた。
1990年代に平田正範氏がすべて翻刻。

民吉に関する新たな事実が判明！

- ・ 『起原』と『宜珍日記』は補完関係にある。



東向寺からの修業受け入れ依頼

・ 享和4年（1804・文化元年）

3月29日 東向寺から上田家に使僧が来て「尾州瀬戸村民吉と申す仁」を高浜皿山に置いてほしいと天中和尚から依頼状来る。



享和4年3月27日 東向寺より上田源作宛『依頼状』 真実展展示・上田資料館蔵

3月30日 東向寺僧と民吉、皿山へ来る。民吉は近日引越の予定。幸右衛門・保作（高浜窯の現地リーダーの二人）へ宜珍から書状遣す。

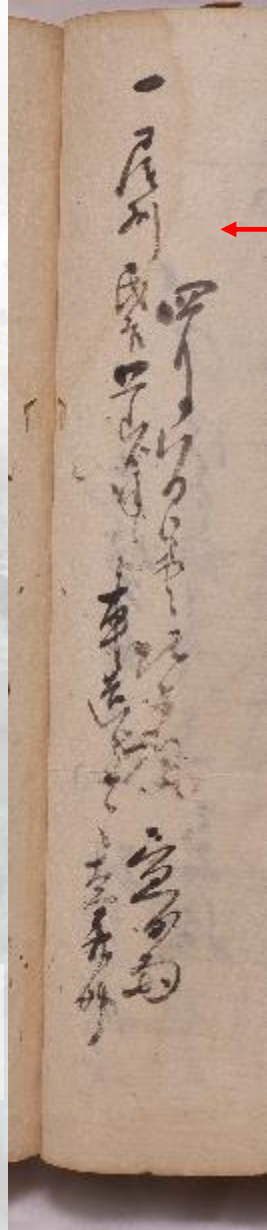
・ 『起原』和尚聞届け其後使僧を持って民吉を同道させ高浜の窯元植田元作へ往ける

民吉と宜珍出会う 享和4年の宜珍日記



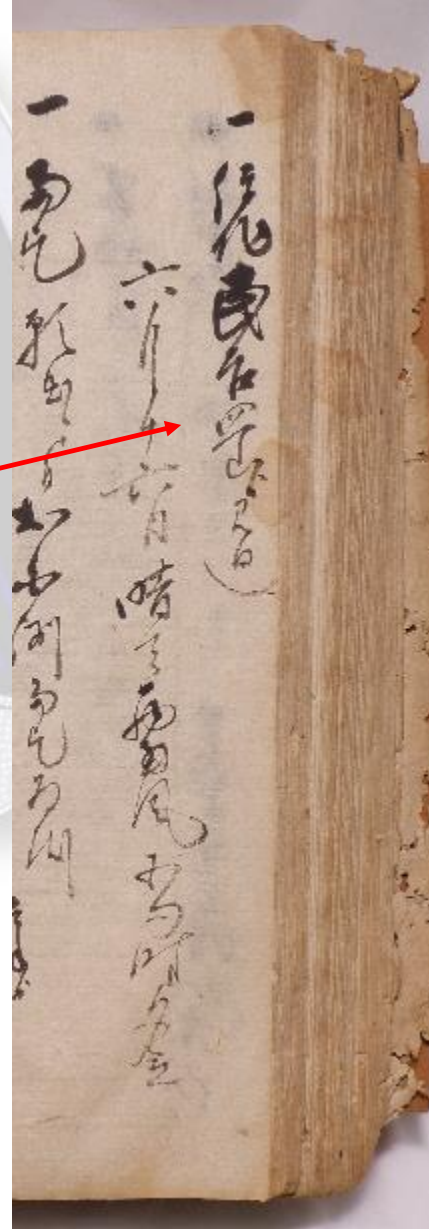
享和四年『子日記』

真実展展示・上田資料館蔵

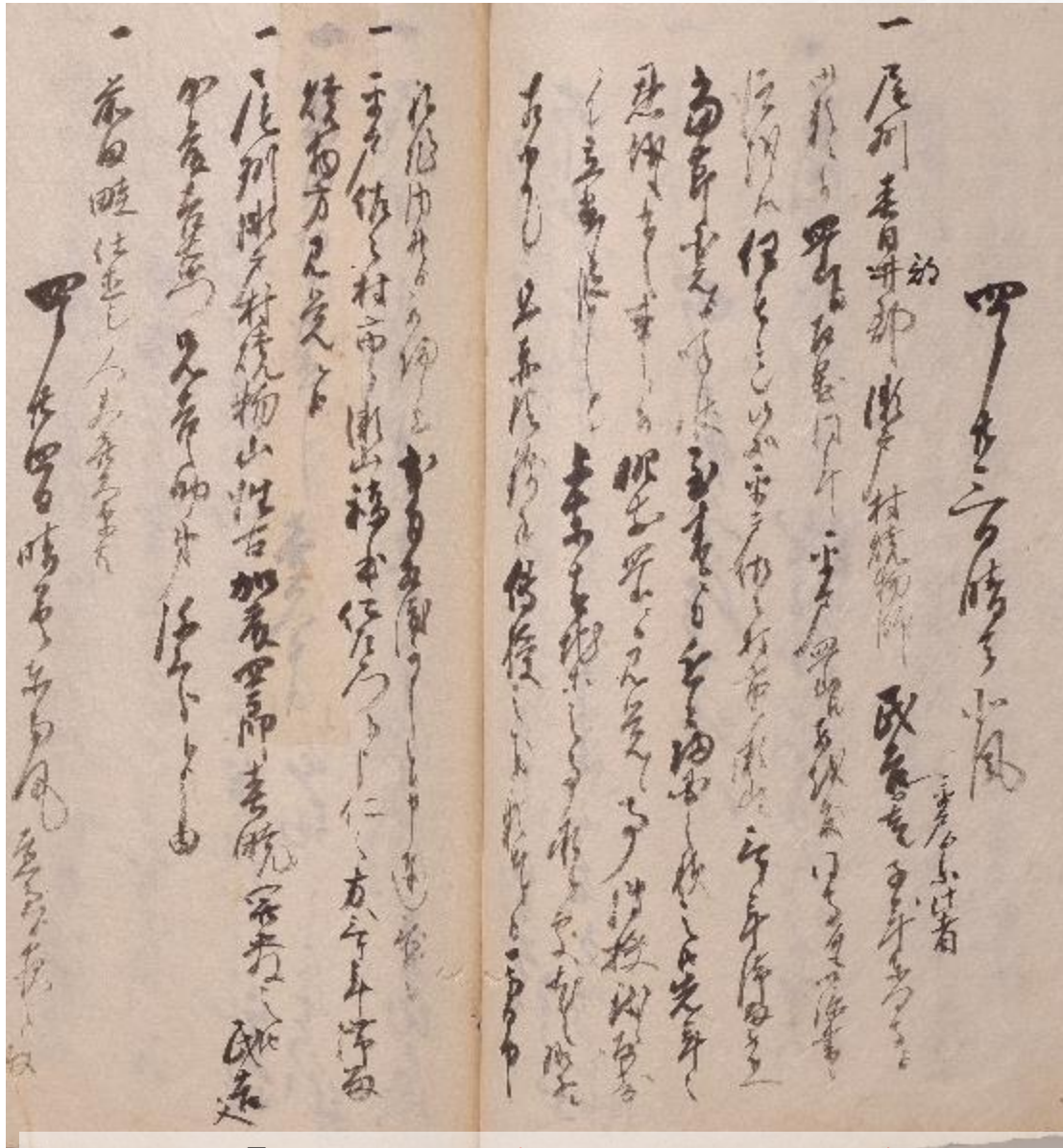


- ・ 4月5日 宜珍、民吉と面会。皿山（窯）へは4月3日に到来。
- ・ 4月8日 民吉を皿山から呼んで「車造らせ候」大工喜助。
⇒上田庄屋宅で、ろくろを製作。
～2か月音沙汰なく～
- ・ 6月15日 保作と民吉、皿山より（庄屋家に）参る。
- …この年『日記』には他記録なし…

- ・ 『起原』では
四月下旬より細工に取り懸り
一日に茶碗250程宛作候様仕覚
此所に八月下旬迄罷り在り候
一日に一度宛里芋（サツマイモ）を食す



文化4年（1807）日記 民吉、高浜を再訪する

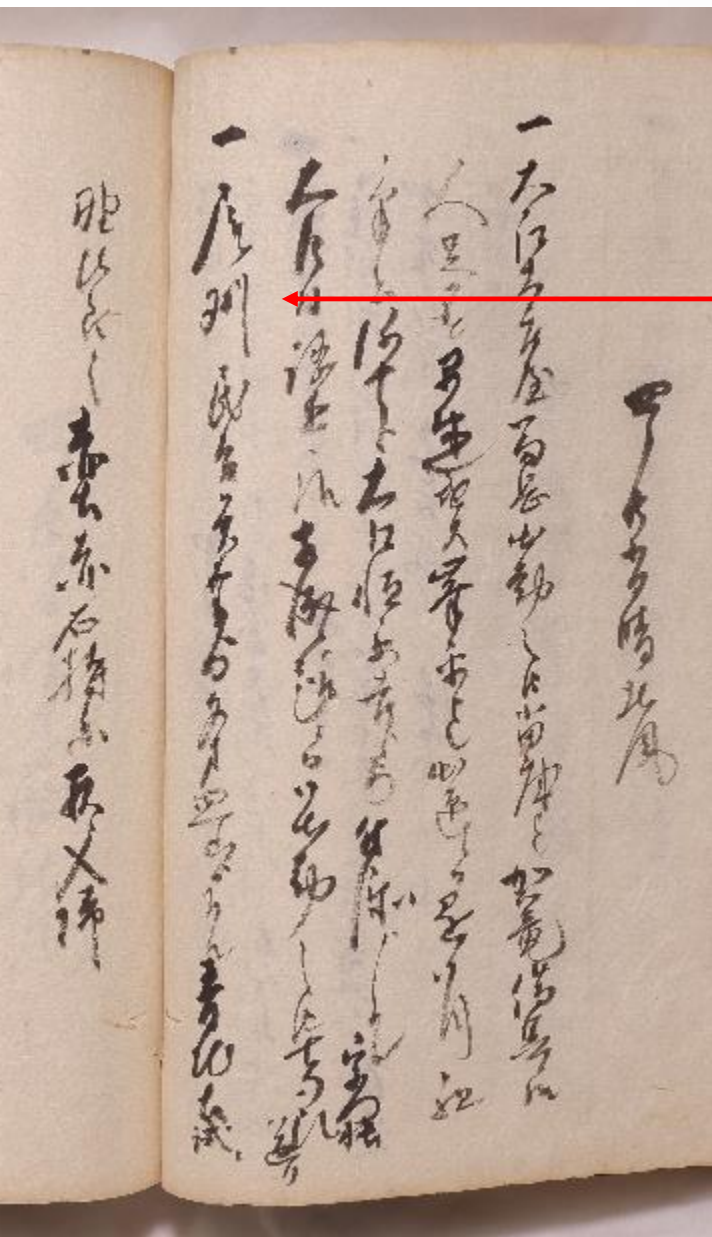


・4月23日 尾張国瀬戸村の民吉、平戸から来る。この人は、子年（享和4年）に東向寺からの依頼で皿山に置いたが、その年中に「平戸へ行きたい」との意向で、東向寺からの添え状もあったので、本人の希望通りにさせたところ、2・3年ほど平戸佐々村市ノ瀬窯に滞在したとのこと。

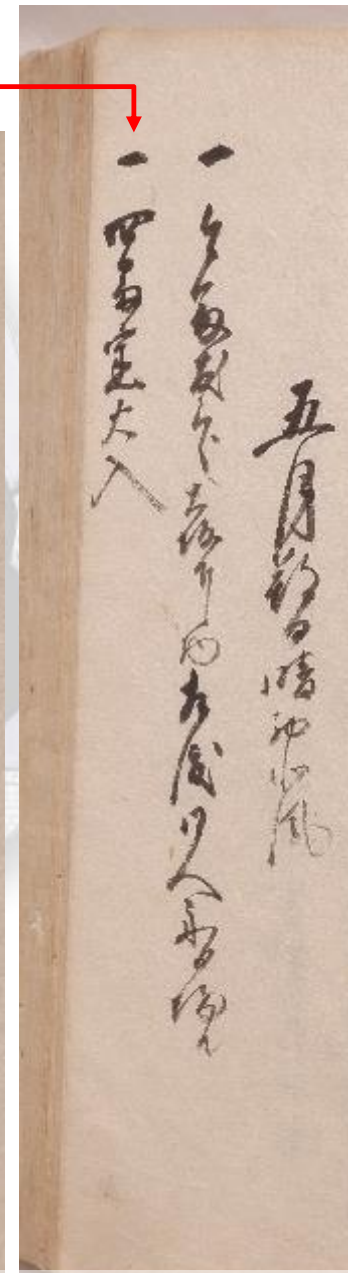
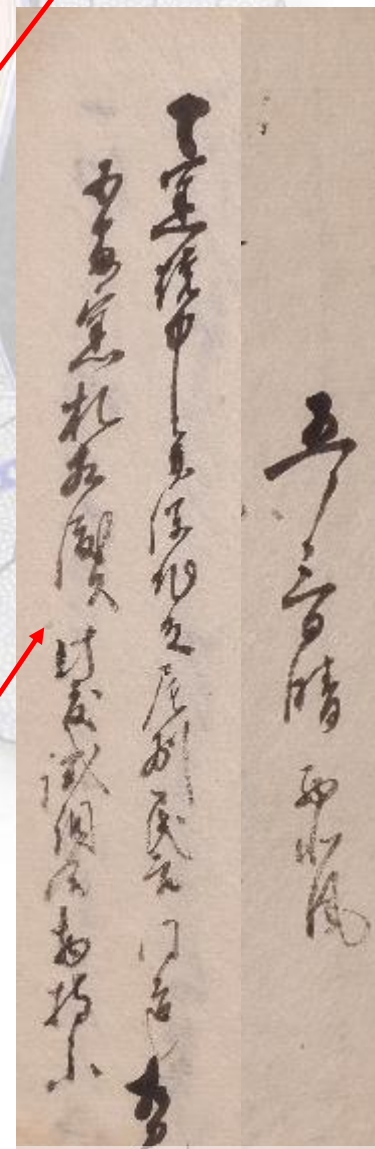
今回、国元から召喚状が来て近々帰国の予定とのことで「先年の恩義もあることから、肥前で習得した技術を伝えるため立ち寄った」とのことであった。彼の云う釉薬や青磁の様子は、もっともな事に聞こえた。また、色絵の技術の伝授を請われたので「一両日中に、礼作（宜珍弟）が内野村（天草市五和町）から帰れば、書付（伝授書）を渡すことにしよう」と伝え、滞在を促した。

瀬戸村の焼き物は、はるか昔に加藤四郎が開発し、民吉は父が加藤吉右衛門、兄に吉之助、弟弥三郎、というそうだ。

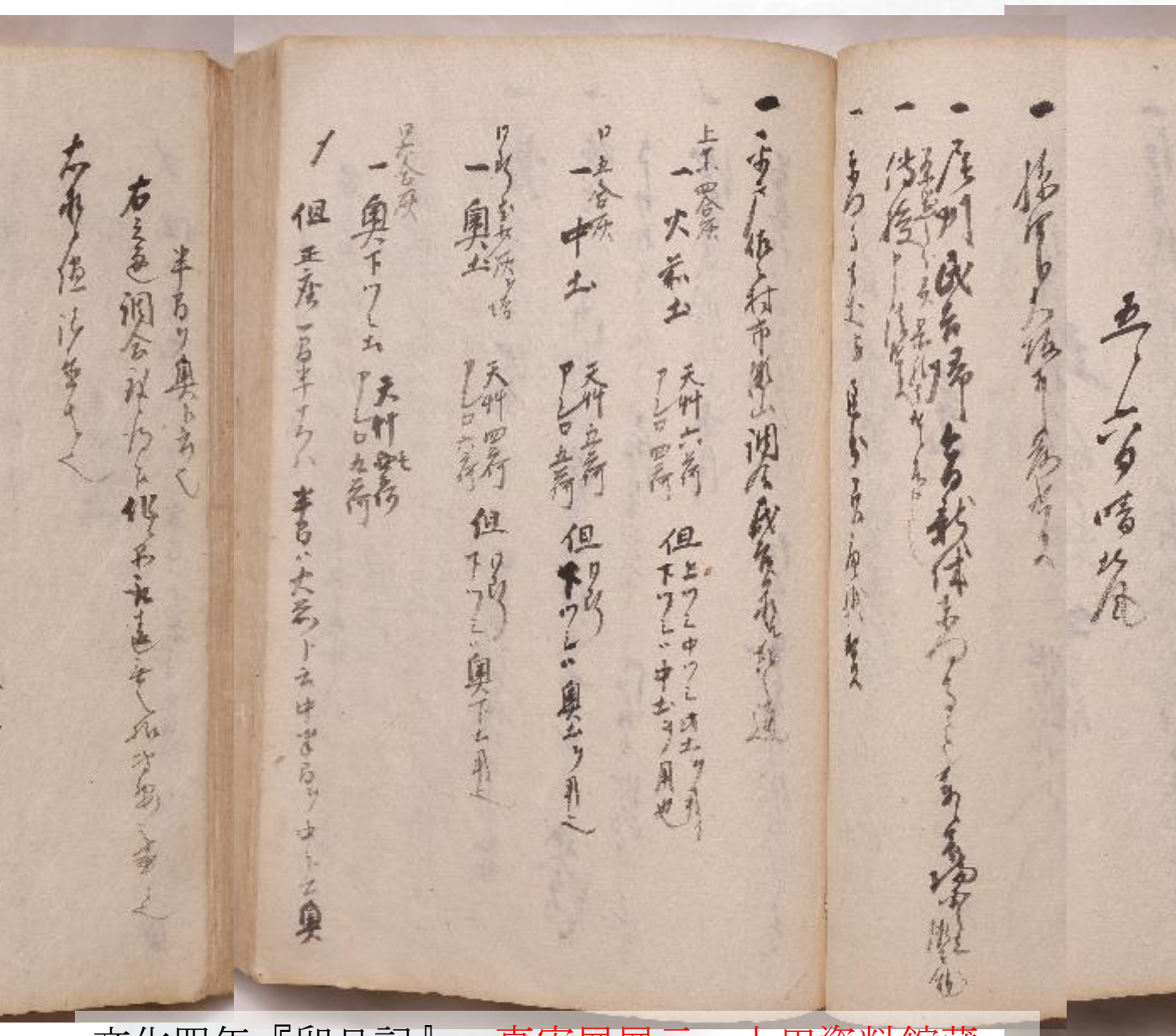
帰国前の滞在。12日間の技術交流。



- 4月25日 民吉、幸右衛門と一緒に夕方皿山から来る。青磁原料になる野平の赤土・赤石を持参。（青磁土試）
- 5月1日 四番窯火入（年4回目の火入れ）。
⇒ 5月8日 此度焼物極上之出来
- 5月3日 窯焼き職人と保作と民吉が連れ立ってきたので、五番窯の札を渡した（この年5回目の焼成許可ということ）。今回、試し焼きする調合物を持参している。



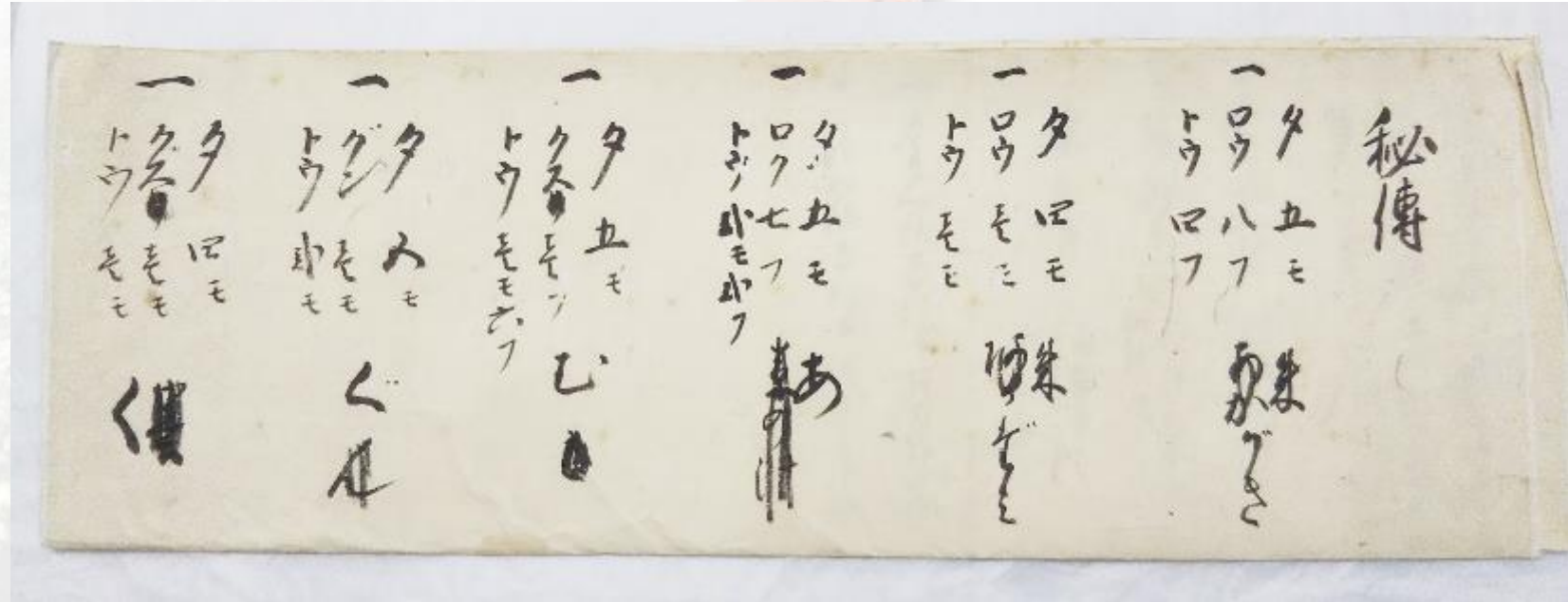
民吉・宜珍のラストデイ



- ・ 5月6日
民吉帰る。今日東向寺まで参る手筈。
 - (1) 帰国後に瀬戸焼の上質な茶器と絵薬を送ってもらう約束をした。
 - (2) 色絵の技術を伝授した。東向寺の住職へ返書も託した。
 - (3) 平戸佐々村市瀬窯における上薬・素地土の調合について、民吉から左の通り伝え聞いた。
- ・ 『起原』
天草の窯細工人三輩来り尾張表へ同道呉候様申し候。
惣作一人同道の筈にて文化四年卯五月十三日天草を出立仕り候。
時に東向寺にて旅用金五両拝借

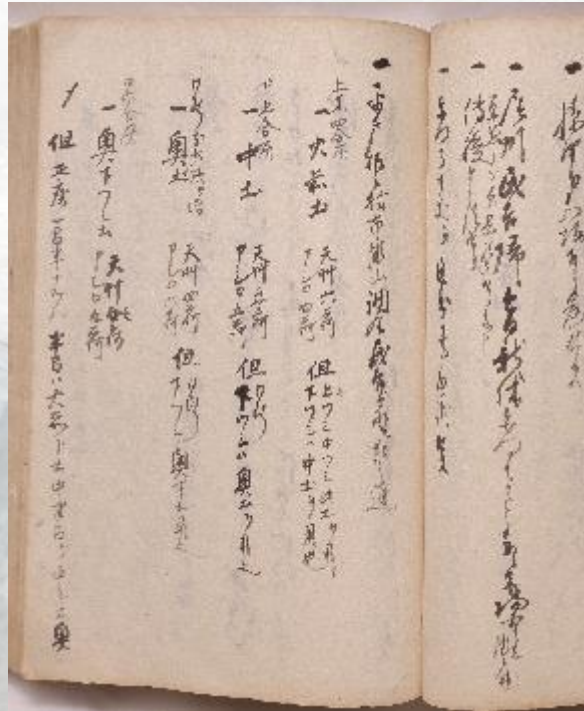
上田家に残る民吉への伝授書

- ・民吉に伝授した色絵の調合秘伝書の下書き。
⇒多数の打消し線から宜珍の推敲の様子が見える。
- ・朱がき-白玉 5 匁・ロウハ 8 分・唐土 4 分
朱ダミ-白玉 4 匁・ロウハ 1 匁・唐土 1 匁
青-白玉 5 匁・緑青 7 分・唐土 2 匁 2 分
紫-白玉 5 匁・呉須 1 分・唐土 1 匁 6 分
群青-白玉 5 匁・群青 1 匁・唐土 2 匁
黒-白玉 4 匁・呉須 1 匁・唐土 1 匁
黄色-白玉 5 匁・黄土 8 分・唐土 2 匁
山吹-金 1 匁・ホウ砂 2 分・唐土 2 分 5 厘



民吉が宜珍に教えたこと

- (肥前の) 青磁焼成技術
⇒ 高浜窯ではそれまで、まともな青磁はできなかった。
- 佐々における素地・上薬調合率。焼成室内の温度差に気を配った配置。



宜珍と民吉の関係は、一方的な技法伝授ではなく、相互の技術情報交換だった！

焼成室内の配置場所ごとの素地・釉薬調合

奥土 上ツミ 天草陶石 4 荷 網代石 6 荷 上薬 5 合灰 少灰ヲ増ス	奥土 中ツミ 天草陶石 4 荷 網代石 6 荷 上薬 5 合灰 少灰ヲ増ス	奥土 下ツミ 天草陶石 1 荷 網代石 9 荷 上薬 6 合灰	半間
中土 上ツミ 天草陶石 5 荷 網代石 5 荷 上薬 5 合灰	中土 中ツミ 天草陶石 5 荷 網代石 5 荷 上薬 5 合灰	中土 下ツミ 天草陶石 4 荷 網代石 6 荷 上薬 5 合灰 少灰ヲ増ス	半間
火前土 上ツミ 天草陶石 6 荷 網代石 4 荷 上薬 4 合灰	火前土 中ツミ 天草陶石 6 荷 網代石 4 荷 上薬 4 合灰	火前土 下ツミ 天草陶石 5 荷 網代石 5 荷 上薬 5 合灰	半間

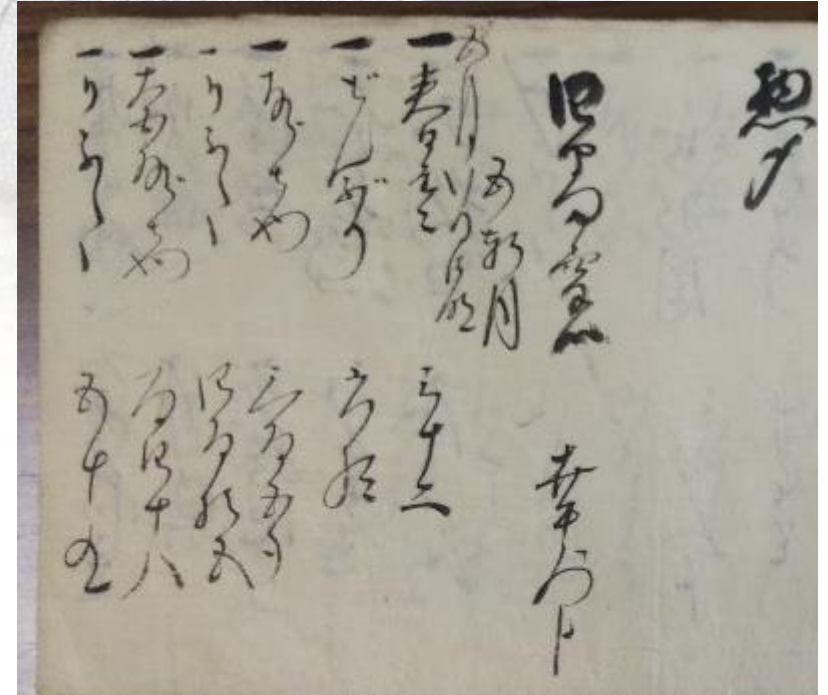
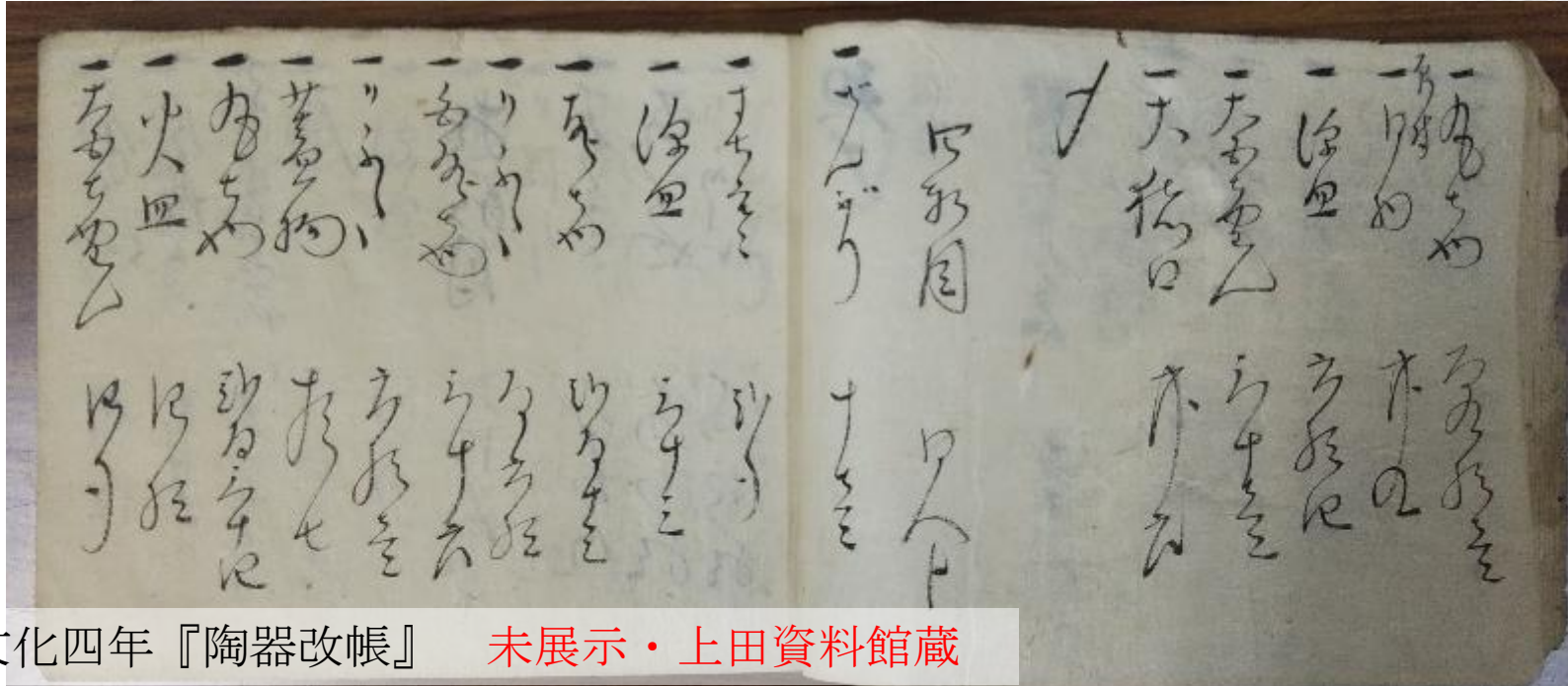
※「網代石」とは長崎県佐世保市針尾島に産出する陶石。三川内焼原料。

民吉帰国前滞在期間の焼成陶磁器 その1

民吉が指導したので「極上の出来」だったのでは？

四軒目	同人	四番窯	幸右衛門
どんぶり	十壺	五軒目	
春寒	式	五月八日口明	
澄皿	三十三	春寒	三十二
ならちや	式百十三	どんぶり	六拾
同ふた	百六拾	ならちや	三百五
白ならちや	三十六	同ふた	四百拾五
同ふた	六拾壺	大白ならちや	百四十八
蓋物	拾七	同ふた	五十九
丸ちや	式百三十四	丸ちや	百九拾壺
火皿	四拾	同物	廿九
大白ちやわん	四	澄皿	六拾四
		大白ちやわん	三拾壺
		大猪口	廿六
		印付	

文化四年 陶器改帳
 (その年の高浜窯での窯内生産品目・数を記した帳簿)



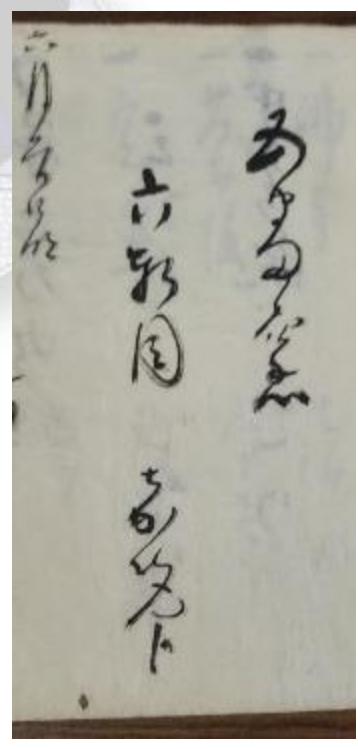
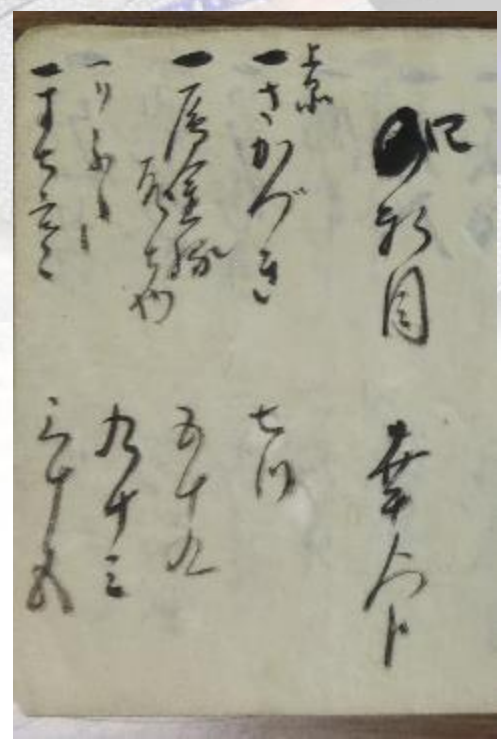
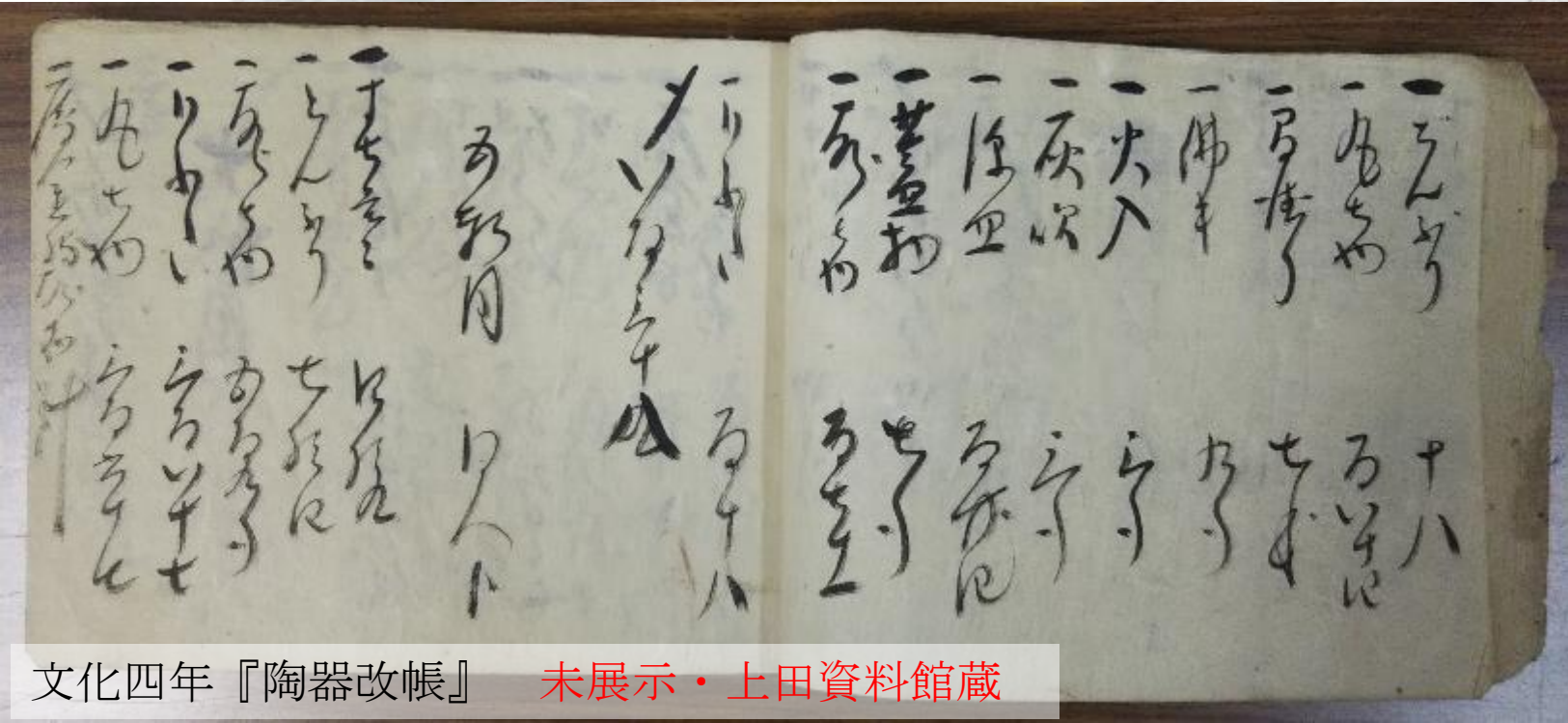
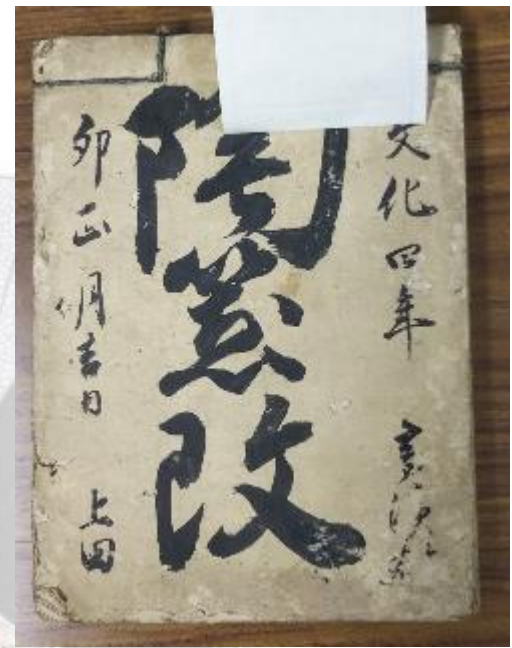
文化四年『陶器改帳』 未展示・上田資料館蔵

民吉帰国前滞在期間の焼成陶磁器

その2

五軒目	同人	さかづき	七
春寒	四拾九	■金縁ならちや	五十九
とんぶり	七拾四	同ふた	九十三
ならちや	五百九	春寒	三十五
同ふた	三百八十七	どんぶり	十八
丸ちや	三百六十七	丸ちや	百八十四
■金縁ならちや	十	間徳り	七
		佛キ	九
		火入	三
		灰吹	三
		澄皿	百廿四
		蓋物	七
		ならちや	百七十一
		同ふた	百十八
		八百三十八	

五番窯
六軒目
六月二日口明
(略)
嘉右衛門



文化四年『陶器改帳』 未展示・上田資料館蔵

民吉帰国後、幸右衛門窯で青磁焼成に成功

・9月20日

八番窯焼物

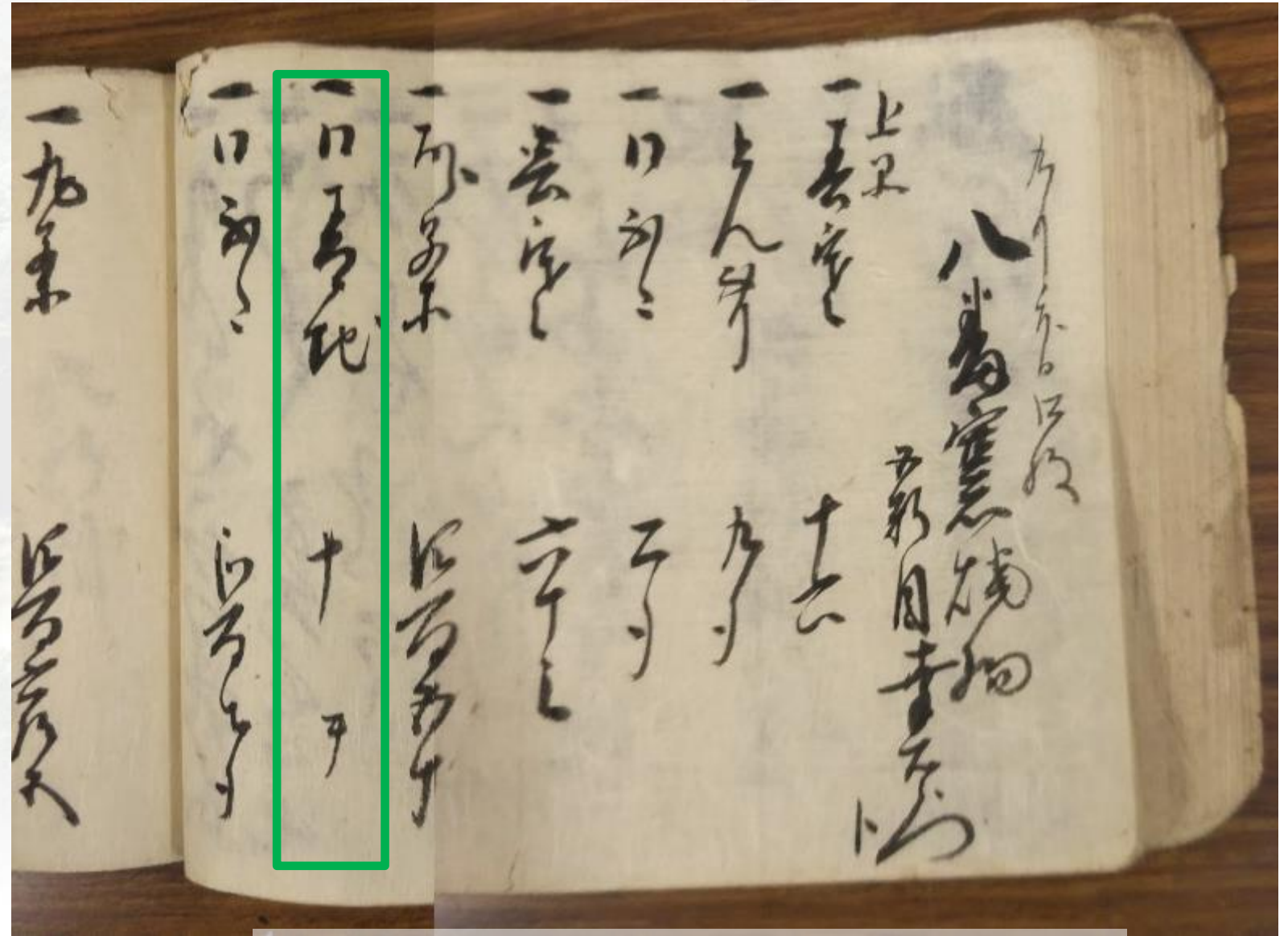
五軒目 幸右衛門

一	奈良茶	450
一	同青地	10
一	同ふた	450

この青磁焼成は民吉が伝えていった技術によるものと思われる。

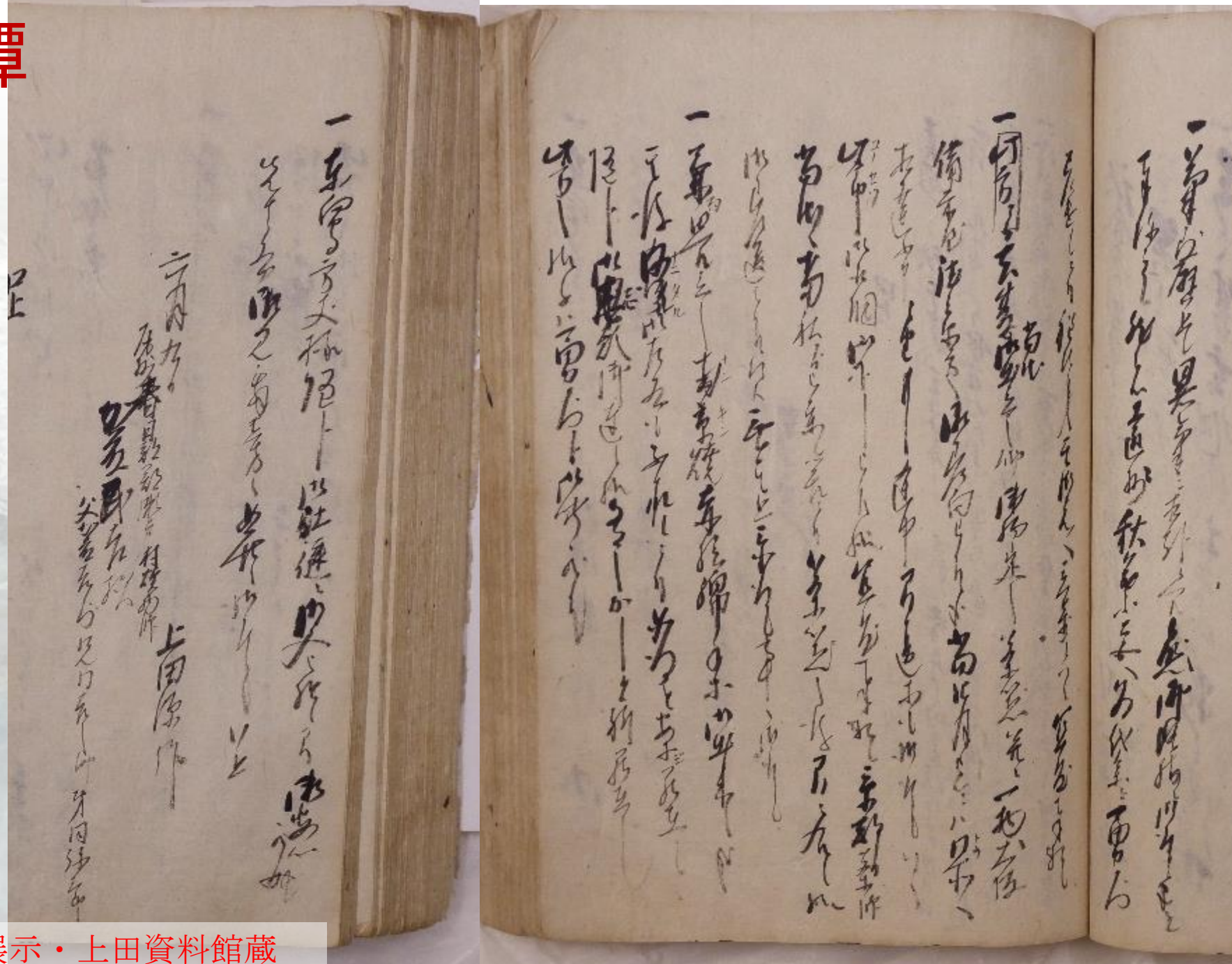
高浜窯では発掘調査が未実施で、青磁破片もほとんど未確認。

⇒将来の発掘調査に期待



文化5年後日譚

- 番頭勇右衛門（小豆島出身）父病気のため見舞い帰省。兼ねて遠江代参を命ぜられ、途中瀬戸へも立ち寄った。その際の書状内容。



文化五年『辰日記』

真実展展示・上田資料館蔵

宜珍から民吉への手紙 文化5年日記

一筆啓上します。夏に向かいつつありますが、いよいよご健勝のことと思います。さて、遠江の秋葉神社へ、勇右衛門を代理参拝に遣わすのですが、程なくそちらへも立ち寄らせてますので、よろしくお願ひします。

昨年夏、こちらを出立される時に約束した茶器と一物（呉須のこと）について、大坂の備前屋徳兵衛のところまで送っていただいたでしょうか？この4月までには当方のところに到着していないので、もし途中で間違い等があったならば、お調べくださいますようお願いいたします。この秋、京都の茶師が当地へ来ることになっているので、茶器をそれに間に合うよう送っていただくと、この上なくかたじけないです。

また、兼ねて切望されていた磁器の色絵生産（「南京焼赤絵錦手」）は成功したでしょうか？その後、なんらの状況も承っていないので（「其後何タル御左右も不承候ニ付」）、どうなったかなあと考えております。ずいぶん、熱心の志願でしたので、ご成功をお祈りしております。こちらの様子は、勇右衛門から聞いてください。

東向寺のご住職も、とても元気でいらっしゃいますのでご安心を。まずはお見舞い方々、以上のとおりです。

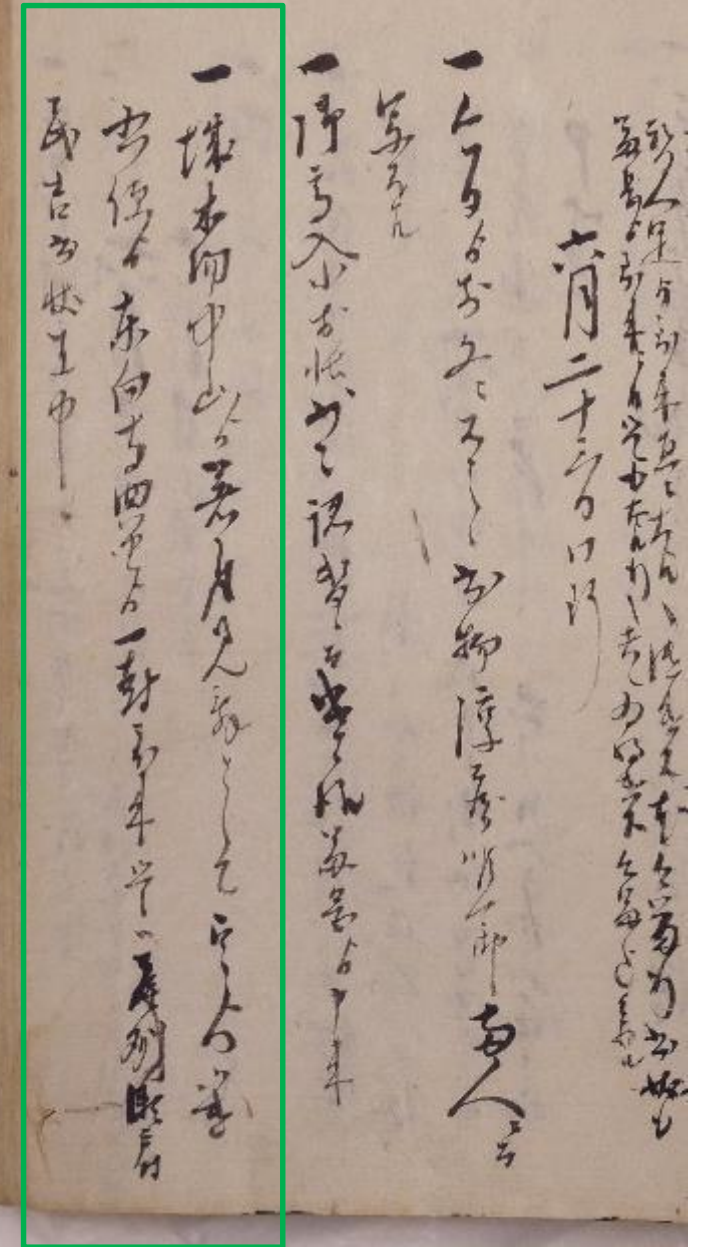
六月九日 上田源作

尾州春日部郡瀬戸村焼物師 加藤 民吉 様

父加藤吉右衛門・兄同吉之助・弟同弥三郎

民吉の返事と勇右衛門 (上田家番頭) の遠・尾・美歴 訪

- ・ 6月10日 手代勇右衛門小豆島へ出立。下関経由で小豆島へ。尾張一物(呉須)手本も少し持参させる。
- ・ 6月23日 東向寺典座より一通書状到来。これは尾州瀬戸村民吉書状。
⇒ 偶然の行き違い? もしくは、6月9日の出発に先立って、民吉に情報が行き、速達で書状が来たか?

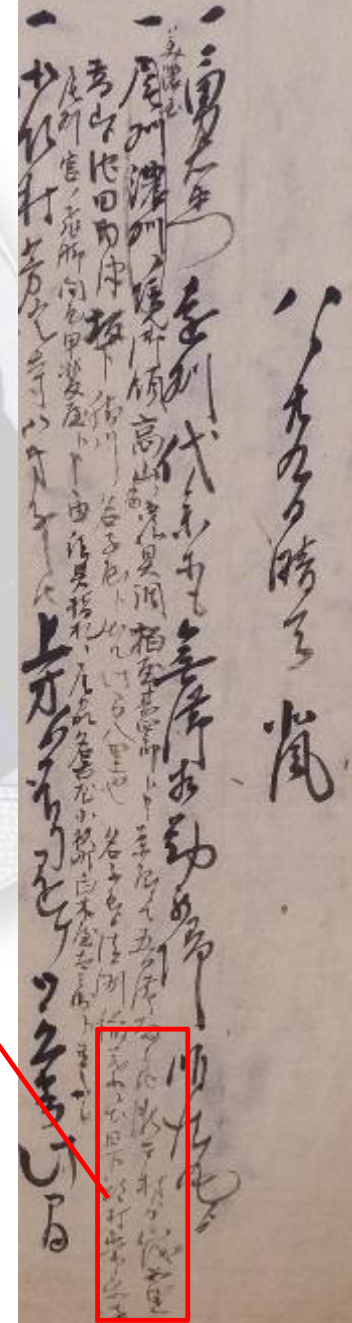
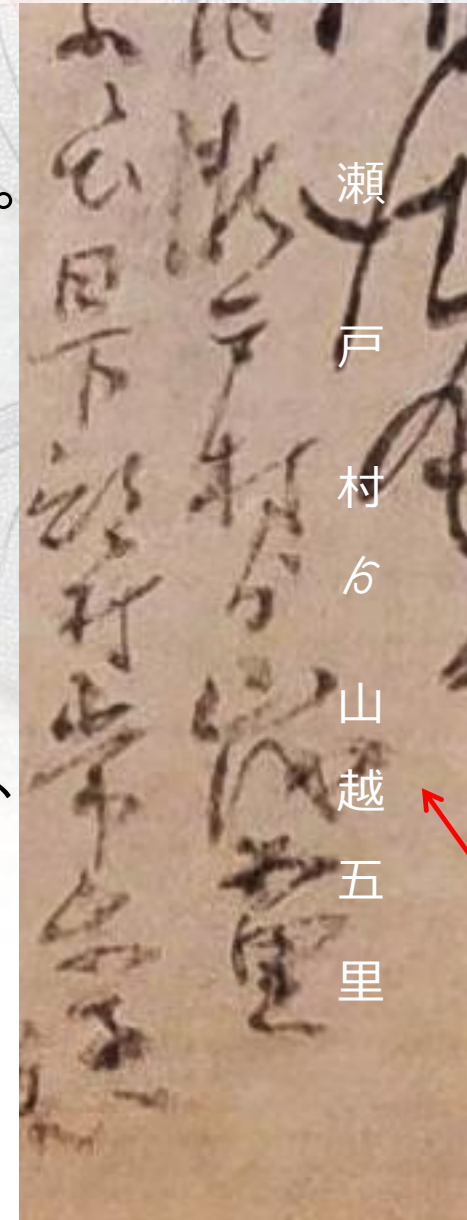
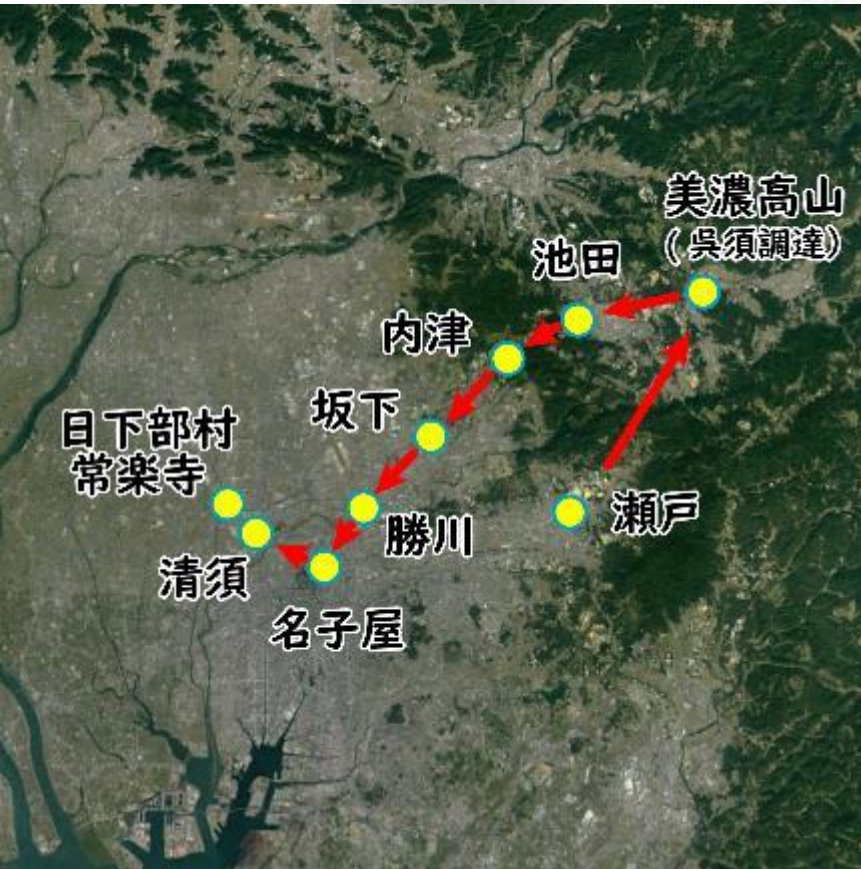


勇右衛門は民吉に会ったのか？

・ 8月29日

勇右衛門、遠州代参、滞りなく完了し明德丸で帰着。美濃国（尾州濃州ノ境）高山宿で上薬を調達。瀬戸から山越え5里の（美濃）高山へ行き、池田（多治見市）・内津・坂下・勝川（いずれも春日井市）を通り、名古屋へ出た。

その後、清須稲葉に出て、日下部村常楽寺へ参る。尾州宮ノ飛脚問屋は甲斐屋というそうだ。絵具の指札には、尾州名古屋小杉町白木屋太兵衛とある。



民吉に依頼した茶器 もしかして??



志野沓形茶碗 上田資料館蔵

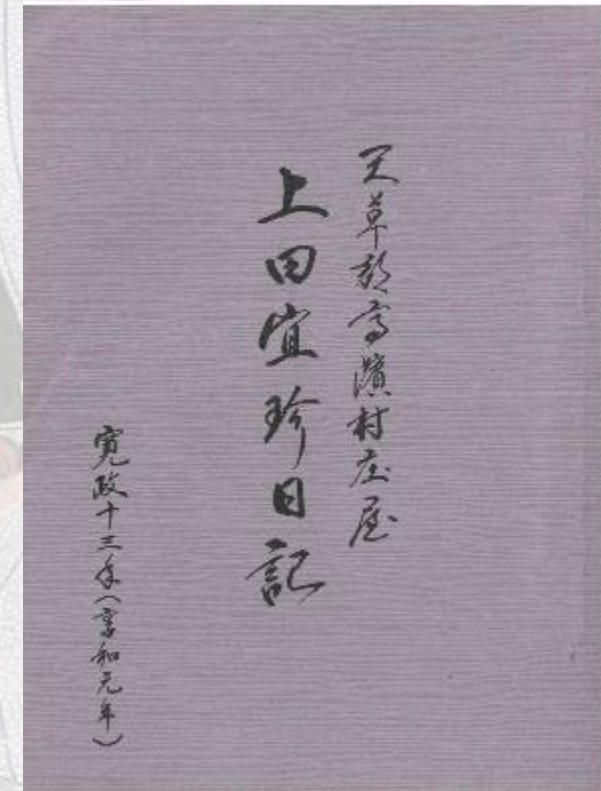


- 1年越しで、民吉に送付を依頼した茶器が送られた形跡はなし。しかし、上田家所蔵陶磁器約900件のうち、最も古い陶磁器で、17世紀代志野茶碗の本例。もしかしたら、民吉から宜珍へ送った茶碗なのでは？と想像がふくらむ

まとめにかえて

50 : 50の関係で★

- ・ 上田家に残る資料の解読は、民吉の新たな足跡を明らかにした。特に『上田宜珍日記』に残る民吉の記録は、『染付焼起原』と対比できる資料の上、両者には時系列上の矛盾もない。
- ・ これを見る限り、従来の「上田宜珍が加藤民吉に、見返りなしに色絵技術を伝授した」という見方は、必ずしも正しくない。宜珍は、肥前の調合・窯内配置の技術、青磁の製法を民吉から習い、また瀬戸の茶器も所望した。さらに呉須の入手も企図している（結果として呉須入手は美濃土岐で行うこととなった）。五分五分の技術交流とみる方が真に迫っているのでは。
- ・ 文化4年の『陶器改帳』の発見は、本展のための資料確認をした後、偶然に見つけたもの。まだ上田家文書の未解読資料から新たな歴史が発見される可能性もあり。地道で継続的な調査研究が重要。



上田宜珍日記（翻刻版）
計20巻

天草ロザリオ館で好評販売中！
ぜひ、市立図書館へ★

瀬戸市 天草市

交流連携協定締結式

これからも末永いお付き合いをお願いいたします



ご清聴ありがとうございました